

1:26 ところで、その六か月目に、御使いガブリエルが、神から遣わされてガリラヤのナザレという町のひとりの処女のところに来た。 1:27 この処女は、ダビデの家系のヨセフという人のいいなずけで、名をマリヤといった。 1:28 御使いは、入って来ると、マリヤに言った。「おめでとう、恵まれた方。主があなたとともにおられます。」 1:29 しかし、マリヤはこのことばに、ひどくとまどって、これはいったい何のあいさつかと考え込んだ。 1:30 すると御使いが言った。「こわがることはない。マリヤ。あなたは神から恵みを受けたのです。 1:31 ご覧なさい。あなたはみごもって、男の子を産みます。名をイエスとつけなさい。 1:32 その子はすぐれた者となり、いと高き方の子と呼ばれます。また、神である主は彼にその父ダビデの王位をお与えになります。 1:33 彼はとこしえにヤコブの家を治め、その国は終わることがありません。」 1:34 そこで、マリヤは御使いに言った。「どうしてそのようなことになりえましょう。私はまだ男の人を知りませんのに。」 1:35 御使いは答えて言った。「聖霊があなたの上に臨み、いと高き方の力があなたをおおいます。それゆえ、生まれる者は、聖なる者、神の子と呼ばれます。 1:36 ご覧なさい。あなたの親類のエリサベツも、あの年になって男の子を宿しています。不妊の女といわれていた人なのに、今はもう六か月です。 1:37 神にとって不可能なことは一つもありません。」 1:38 マリヤは言った。「ほんとうに、私は主のはしためです。どうぞ、あなたのおことばどおりこの身になりますように。」 こうして御使いは彼女から去って行った。 1:39 そのころ、マリヤは立って、山地にあるユダの町に急いだ。 1:40 そしてザカリヤの家に行って、エリサベツにあいさつした。 1:41 エリサベツがマリヤのあいさつを聞いたとき、子が胎内でおどり、エリサベツは聖霊に満たされた。 1:42 そして大声をあげて言った。「あなたは女の中の祝福された方。あなたの胎の実も祝福されています。 1:43 私の主の母が私のところに来られるとは、何とということでしょう。 1:44 ほんとうに、あなたのあいさつの声私の耳に入ったとき、私の胎内で子どもが喜んでおどりました。 1:45 主によって語られたことは必ず実現すると信じきった人は、何と幸いなことでしょう。」

導入

今日は、待降節の第一週目です。今後 6 週間は黙示録の学びを離れて、聖書に記された最初のクリスマスのお話に注目したいと思います。昨年は、ヨハネの福音書からクリスマスについて学びましたが、今年は、ルカの福音書から学んでいくことにしましょう。

聖書の新しい書から学びを始めるときは、まず著者について知っておくのがよいでしょう。

ルカはギリシャ人の医師でした。彼はコロサイ 4 : 14 で、「愛する医者」と呼ばれています。

ルカは、使徒の働きの著者でもあります。（使徒 1 : 3）文字数から考えると、ルカは新約聖書の約 4 分の 1 を記した人ということになります。

ルカは、パウロの宣教旅行の同行者だったと考えられます。

四福音書の著者の中で、唯一、イエスの人生と働きに直接触れていない人物です。

ルカは、イエスの人生をその目で見た人たちから情報を得ました。

ルカは 1 : 1-4 で、イエスの人生について記した理由を述べています。

1. ルカは、イエスの人生に関わりを持った人々と出会いました。そして、イエスの人生におけるすべての出来事を綿密に調べたと言います。イエスの地上の母マリヤを始め、すべての重要人物から詳しい聞き取りをおこなったと考えられます。
2. ルカは、イエスの人生について順序立てて書き記したいと考えました。
3. ルカは宛先である「テオピロ」に、イエスについての事実が正しいことを知らせたいと思いました。

ルカは、実際に起こった日常の話に基づいて福音書を記しました。その多くは「喜び」をテーマとしています。

ルカは世界中の貧しい人々や失われた人々、そして傷ついた人々を思ってこの福音書を記しました。

女性とその日常生活について多くを記し、医師の性質上、ディテールを非常に大切にしました。

そういう理由で、ルカが最初のクリスマスの話をもっとも詳細に記したのかもしれませんが。

これから始まるクリスマスの学びは、ルカが記したイエスの降誕とマリヤに焦点を当てていきます。

先ほど読んだ聖書箇所には、おもに3つの出来事が記されています。

ひとつめは、御使いガブリエルからマリヤへの告知です。

次に、御使いに対するマリヤの問かけがあります。そして最後に、マリヤの親類エリサベツをとおしてこの出来事が確証づけられます。

聖書箇所の学びに入る前に、ルカの福音書の冒頭に登場するふたりの赤ちゃんを紹介しましょう。

最初の告知は、子どものいない老齢の夫婦に子が生まれるというものでした。

ルカ 1: 5-25 には、マリヤの親類エリサベツに子どもが生まれるという告知について記されています。

不妊だったエリサベツが生む子は重要なキーパーソンで、イエスの誕生とつながります。

イエスを世に知らせる人物となるからです。

子どもの父親であるザカリヤは、息子が与えられるように長年祈っていましたが、実現しませんでした。

しかし、神は奇跡を起こそうとしておられました。

神の摂理により、ザカリヤはその年、神殿で香をたく当番にあたりました。この奉仕は、一生に一度しか回ってこない奉仕です。

彼が神殿の中にいると、主の使いが現れ、もうすぐ祈りが答えられて妻エリサベツが男の子を産むとザカリヤに告げました。

そして、息子をヨハネと名付けるようにと言い、息子が重要な役割を果たすことも告げました。

ザカリヤの息子は胎内で聖霊に満たされ、神の御前にすぐれた者となるのです。

その子は、イエスを受け入れられるよう人々を整える役割を果たします。

残念ながら、ザカリヤは御使いの告知を信じるできませんでした。

それで、何らかの証拠を求めました。

御使いは、証拠がほしいならあげようと言い、息子が産まれるまで話すことができなくなると言いました。ザカリヤは神殿から出てきましたが、この驚くべき知らせを人々に伝えることができませんでした。御使いをとおして語られた神のことばを信じる信仰がなかったからです。

ルカは、ふたりの重要な子どもが生まれようとしていることを知らせたかったのです。ふたりとも、それぞれ神の奇跡による子でした。

ふたりはお互いに関連があり、ふたりとも、罪の罰からこの世を救う神のご計画の一端を担う人物でした。これを念頭に、今日の聖書箇所を学んでいきましょう。

1. 御使いガブリエルによるマリヤへの告知 (26-33 節)

まず、マリヤという処女が登場します。処女とありますから、彼女はそれまで男性と性的な関係を持ったことがないという意味です。

マリヤは、ヨセフという男性と婚約中でした。ヨセフは、ユダヤの王ダビデの子孫でした。

マタイ 1: 1-16 にヨセフの家系図があり、そこで、先祖がダビデ王であることが確認されています。

御使いガブリエルはマリヤに大切な知らせを持ってきました。

- a) マリヤは恵まれた人である。 — ここで使われているギリシャ語の単語は、神の「恵み」がマリヤの上に注がれているという意味です。マリヤは十代の若い女の子で、特別な人ではありませんでした。しかし、神は特別な恵みを彼女に注ぐことを選びました。マリヤにはあらゆる必須条件がそろっていましたが、ダビデの家系の一員でもありませんでした。それでも、神の目には罪人であり、神の恵みが注がれなければならなかったのです。

この同じ単語がエペソ 1: 6 でも使われているのは非常に興味深い事実です。

エペソ 1:6 それは、神がその愛する方であって私たちに与えてくださった恵みの栄光が、ほめたたえられるためです。

つまり、マリヤをひとりの信徒以上の特別な存在のように扱うことはできないということです。残念ながら、ローマカトリック教会は、マリヤを他の信徒とは違う特別な存在として教えます。ローマカトリック教会は良いこともたくさんしていますが、マリヤについてや救いの道についての真理を教えていません。

聖書は、救いの道は常に恵みをとおしてであると教えます。私たちはそれを受けるにふさわしい者ではありません。救いは常にイエスの十字架の御業を信じる信仰をとおして与えられるものです。私たちの良い行いは、私たち自身の救いに何の貢献もしません。

エペソ 2 : 8-10

2:8 あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。 2:9 行いによるものではありません。だれも誇るためのないためです。 2:10 私たちは神の作品であって、良い行いをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。神は、私たちが良い行いに歩むように、その良い行いをもあらかじめ備えてくださったのです。

まず、御使いのことばからわかることは、マリヤが重要な役割のために神に選ばれたことです。そして、選ばれた理由は、マリヤに対する神の「恵み」でした。

私たちにも同じことが言えます。私たちがイエスを自らの救い主として受け入れるなら、私たちも神に仕えるよう、神は私たちを選んでくださいます。

この世における私たちの奉仕と役割も重要です。

ですから、がっかりしないでください。神があなたのためにを選んでくださった務めは、神のご計画と目的において重要性の劣るものではありません。

しかしここで、考えなければならないことがあります。

神が特別な務めのために選ばれる人には、それなりの犠牲が伴います。

マリヤは神に選ばれて、イエスを育てる役割を与えられました。そこには、あらゆる課題や難題がありました。私たちも、イエスに仕えるには犠牲が伴うことを考慮に入れておくべきです。イエスの本物の弟子となるには、犠牲を払わなければなりません。

それは、自らの人生という犠牲です。自分の好きなように生きることがもうできません。神の目的に人生を明け渡し、神が選ばれた道に従って歩いていかなければならないのです。

先日のリトリートで、イエスの弟子になる意志を表明した人は、これが一番大切なことだとわかっておいてください。

イエスについていくために、残りの人生をささげようという意志が必要なのです。

私が今ここにいるのは、33年前に神のみこころに人生を完全にささげしたからに他なりません。

人生をささげたからと言って、完ペキで過ちのない人生になるということではありません。ただ、神にすべてを明け渡した人生になります。(ローマ 12 : 1-2)

b) マリヤは、特別な男の子を産むと告げられた。

御使いは、マリヤが初めて産む子について大切な知らせを伝えました。

まず、その子が男の子であるということです。当時は超音波画像などはありませんから、通常は産まれるまで子どもの性別はわかりませんでした。

次に、産まれてくる子はイエスと名付けなければならないと言われました。

ユダヤ人の文化では、名前は非常に重要でした。名前がその人の性質を表すものとなるからです。イエスという名はヘブル語で「救い」とか「神は救い」という意味です。

産まれてくる子がイエスと名付けられることがとても重要でした。その子が産まれてくる目的が神からの救いをもたらすことだからです。

マタイ 1 : 21 マリヤは男の子を産みます。その名をイエスとつけなさい。この方こそ、ご自分の民をその罪から救ってくださる方です。」

クリスマスの目的は、人々を罪から救ってくれる救い主がこの世に生まれたことを祝うためです。

多くの人々は、本当の意味や目的を知ることにも考えることもなく毎年クリスマスを祝います。ただ美味しいものを食べてプレゼントをもらってきれいなイルミネーションを見て楽しむ商業的なお祭りになってしまっています。

人々は、クリスマスが一番大切な目的を見過ごしているのです。

このクリスマス、皆さんはクリスマスの本当の目的を見過ごすことがありませんように。

クリスマスは、イエスの生誕を祝うものです。イエスは、ご自身の民を罪から救うためにこの世に来てくださいました。

感謝なことに、神はこの救いの道を異邦人にも開いてくださいました。つまり、私たちも国籍に関係なく、イエスの降誕の恩恵を受けることができます。日本人、ドイツ人、アメリカ人、イギリス人、韓国人、などどこの国の出身でもよいのです。

- c) 御使いは、産まれてくる子についてマリヤに伝えた。
子どもは、「いと高き方の子」と呼ばれます。
これは、「まことの神」に対して使われる呼称です。
創世記 14 : 18-22 を読みましょう。

14:18 さて、シャレムの王メルキゼデクはパンとぶどう酒を持って来た。彼はいと高き神の祭司であった。 14:19 彼はアブラムを祝福して言った。「祝福を受けよ。アブラム。天と地を造られた方、いと高き神より。 14:20 あなたの手に、あなたの敵を渡されたいと高き神に、誉れあれ。」アブラムはすべての物の十分の一を彼に与えた。 14:21 ソドムの王はアブラムに言った。「人々は私に返し、財産はあなたが取ってください。」 14:22 しかし、アブラムはソドムの王に言った。「私は天と地を造られた方、いと高き神、【主】に誓う。

この個所で、シャレムの王メルキゼデクはまことの神を「いと高き神」と呼びます。
この呼び方は、イスラエル人の中で親しまれるようになりました。
異邦人は他の神々を拝みますが、イスラエル人はまことの神「いと高き神」に従いました。
今日、私たちの神は、聖書の神、またはイスラエル人の神であると正しく認識する必要があります。
私たちの神は、聖書をとおしてご自身をあらわされるお方です。そして、ここでは、マリヤの胎から産まれるイエスという人をとおしてご自身をあらわそうとしておられます。

- d) 御使いは、産まれてくる子を永遠の王国の王だと言った。(32-33 節)
神はご自身の民に、預言者イザヤをとおして、約束されたメシヤの統治について約束なさいました。

イザヤ 9 : 6-7

9:6 ひとりのみどりごが、私たちのために生まれる。ひとりの男の子が、私たちに与えられる。主権はその肩にあり、その名は「不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君」と呼ばれる。 9:7 その主権は増し加わり、その平和は限りなく、ダビデの王座に着いて、その王国を治め、さばきと正義によってこれを堅く立て、これをささえる。今より、とこしえまで。万軍の【主】の熱心がこれを成し遂げる。

御使いは、これらの約束を確認し、マリヤが産む子が約束された王であり、その王の王国は永遠のものであると宣言しました。
マリヤは旧約聖書の神についてよく知っていたはずですから、御使いが語った内容をはっきり認識したでしょう。
神がみことばをとおして私たちに語ってくださる時、神のおっしゃることに疑いの余地はありません。
神はご自身のみことばから真理を語られます。そして、神のみことばの知識によって、マリヤはこの御使いの知らせが畏れ多いことだと悟ったのです。
神がみことばをとおして私たちの心に語られる時、私たちはしっかりと聞いて、神のおっしゃるとおりに行動しなければなりません。
神は不可能を可能にするお方です。

2. 御使いの言葉に対するマリヤの反応 (34-38 節)

マリヤが最初に口にしたのは、信じられないという思いではありません。むしろ、処女である彼女の身にどうやってそのような奇跡が起こるのかという問いかけでした。処女ですから、男性と性的な関係を持ったことがないからです。

ザカリヤの場合と違い、マリヤは神が約束されたことをなされるという信仰を持っていました。イエスは永遠の昔、マリヤが生まれる前から存在しておられたので、通常の方法で胎の中に入ることはできません。

御使いは、神の聖霊がマリヤの上に臨み、神の子が彼女の胎に宿ると説明しました。つまり、奇跡の出産です。男性の種をとおした通常の方法ではなく、神の力をとおした超自然的な方法で生まれるのです。

処女受胎は、キリスト教を理解する上でキーポイントとなります。ですから、その理由を説明する必要がありますでしょう。

聖書は、男性の種をとおして生まれた人は皆、罪の性質を持って生まれると教えます。

これは、アダムとエバがエデンの園で神のことばに逆らった罰によるものです。

これについては、創世記 3 章に記してあります。

ローマ 5 : 12-17

5:12 そういうわけで、ちょうどひとりの人によって罪が世界に入り、罪によって死が入り、こうして死が全人類に広がったのと同様に、——それというのも全人類が罪を犯したからです。 **5:13** というのは、律法が与えられるまでの時期にも罪は世にあったからです。しかし罪は、何かの律法がなければ、認められないものです。 **5:14** ところが死は、アダムからモーセまでの間も、アダムの違反と同じようには罪を犯さなかった人々をさえ支配しました。アダムはきたるべき方のひな型です。 **5:15** ただし、恵みには違反の場合とは違う点があります。もしひとりの違反によって多くの人が死んだとすれば、それにもまして、神の恵みとひとりの人イエス・キリストの恵みによる賜物とは、多くの人々に満ちあふれるのです。 **5:16** また、賜物には、罪を犯したひとりによる場合と違った点があります。さばきの場合は、一つの違反のために罪に定められたのですが、恵みの場合は、多くの違反が義と認められるからです。 **5:17** もしひとりの違反により、ひとりによって死が支配するようになったとすれば、なおさらのこと、恵みと義の賜物とを豊かに受けている人々は、ひとりのイエス・キリストにより、いのちにあって支配するのです。

アダムをとおして私たちは罪の性質を受け継ぎました。

そして、イエス・キリストをとおして新しい性質をいただくのです。

ですから、イエス・キリストは、100%聖なる完ぺきなお方でなければなりません。もし、他の人間と同じ方法で生まれたなら、イエスも罪の性質を持って生まれることとなります。

しかし、イエスはすべてにおいて 100%完ぺきな罪のないお方だと聖書は明言します。

ヘブル 4:15 私たちの大祭司は、私たちの弱さに同情できない方ではありません。罪は犯されませんでした。すべての点で、私たちと同じように、試みに会われたのです。

ペテロ第一 1:21-22

1:21 あなたがたは、死者の中からこのキリストをよみがえらせて彼に栄光を与えられた神を、キリストによって信じる人々です。このようにして、あなたがたの信仰と希望は神にかかっているのです。 **1:22** あなたがたは、真理に従うことによって、たましいを清め、偽りのない兄弟愛を抱くようになったのですから、互いに心から熱く愛し合いなさい。

イエスが処女から生まれるという超自然的な方法でこの世に来られなかったら、救いは成立しなかったのです。

けれども、イエスは処女マリヤから生まれました。そのなりゆきは、マリヤがルカに語ったとおりであり、ルカが今日の私たちに語り伝えてくれます。

クリスチャンになるには、イエスの生誕に関するこの重要な教えを信じる必要があります。

御使いに対するマリヤの最終的な答えは 38 節に記されています。

1:38 マリヤは言った。「ほんとうに、私は主のはしためです。どうぞ、あなたのおことばどおりこの身になりますように。」こうして御使いは彼女から去って行った。

マリヤは、「はい、私はあなたが言うことを信じます。私は神のしもべですから、犠牲を払ってもこの特別な任務を受け入れます」と答えたのです。

神はマリヤの心をご存じでした。そして、この重要な任務を任せられる人だをご存じでした。

マリヤは恥をかくこととなります。人々の理解は得られないでしょう。

そうです。マリヤもイエスのために苦しまなければならなかったのです。

ここには、私たちの日常生活に当てはめるべき真理があります。

それは、イエスについていくには常に犠牲が伴うということです。

同時に、犠牲を払う価値があるということです。この世で得る報いは一時的なものですし、常に罪に汚されていますが、神が与えてくださる報いは、永遠のもので、私たちのたましいを満たしてくれるからです。あなたは今日、イエスについていく決心をしますか。

3. マリヤは、親類のエリサベツを訪ねて、自らの体験についての確信を得た。(39-45 節)

御使いガブリエルの訪問という不思議な体験の後、マリヤは急いで親類のエリサベツを訪ねました。エリサベツは、年老いた不妊の女性でしたが、神が奇跡を起こしてくださり、妊娠中でした。マリヤがエリサベツを訪ねて来たと知らされると、エリサベツの子が胎内で踊り、エリサベツは聖霊に満たされました。

そして、「あなたは女の中の祝福された方。あなたの胎の実も祝福されています。」と大声で言いました。この言葉は明らかに、聖霊に導かれた言葉でした。

エリサベツがこう言う前に彼女は聖霊に満たされていたからです。

エリサベツが語った言葉によって、御使いガブリエルと出会ったマリヤの体験は確実に神によるものと確認されました。こうして、マリヤは胎内にユダヤの救い主イエスを宿すという確信を得たのです。

エリサベツは 45 節で、マリヤが信じた御使いからの言葉は実現すると語りました。

それは、神による現実の体験だったのです。

なぜルカはマリヤとエリサベツが会ったことまで記したのでしょうか。

ルカは健全で安定した人物でした。医師であることから、あらゆる物事の詳細に注意を払いました。そして、ルカが福音書を記した目的は、イエスの生と死、そして復活の事実を人々に確信させることでした。ルカはおそらくエリサベツとマリヤの両方からこの出来事について聞いたのでしょうか。

この出来事は、ふたりにとって大きなインパクトを与えたはずですが。

ふたりとも、神のために明確な任務を負った重要な赤ちゃんをこの世に生みだそうとしていたのです。

エリサベツの子は、バプテスマのヨハネとしてイエスのために道を整えるようになります。そして、マリヤの子は、ユダヤ人の救い主イエス・キリストとなるのです。

ここで重要なのは、神が私たちの心や思いが弱いことをご存じで、神と出会った体験について確信を与えてくださることです。

「神さまが語ってくださったとどうしてわかるのですか」と質問されることがよくあります。そんなとき私は、神は通常みことばをとおして語られ、心に確信を与えてくださいます、と答えます。けれども、それだけでなく、祈って神の御声を信じていれば、状況をとおして神が確認させてくださるとも言います。

1992 年 4 月、私は大阪空港から飛び立つとき、聖霊に「地震が起こる前にあなたたちをここから連れ出す」と語られたことを思い出します。

当時は、このことを人に話すべきか慎重になりました。

翌年の 1993 年には、日本に戻る予定でしたが、神はその道を完全に閉ざされました。

1995 年 1 月、神戸でたいへんなことが起こるとい夢を見て初めて、本当に聖霊が心に語られたのだとはっきり確信しました。

確信を得るのに 3 年もかかりました。私が神の御声を心から信じられていたなら、私たちが日本に戻るのをなぜ神が遮られるのかと思ひ悩む必要はなかったでしょう。

たいていの場合は、神が確信をくださるまでそれほど長く待つこともないでしょう。しかし、もし神の答えを待っているなら、どうか辛抱強く待ってください。

神のみことばは天において永遠に定まっています。そして、神は不可能を可能にする神です。神があなたのために天でご計画なされたことは、神にとって実現可能なことです。

ただただ、神を信じましょう。